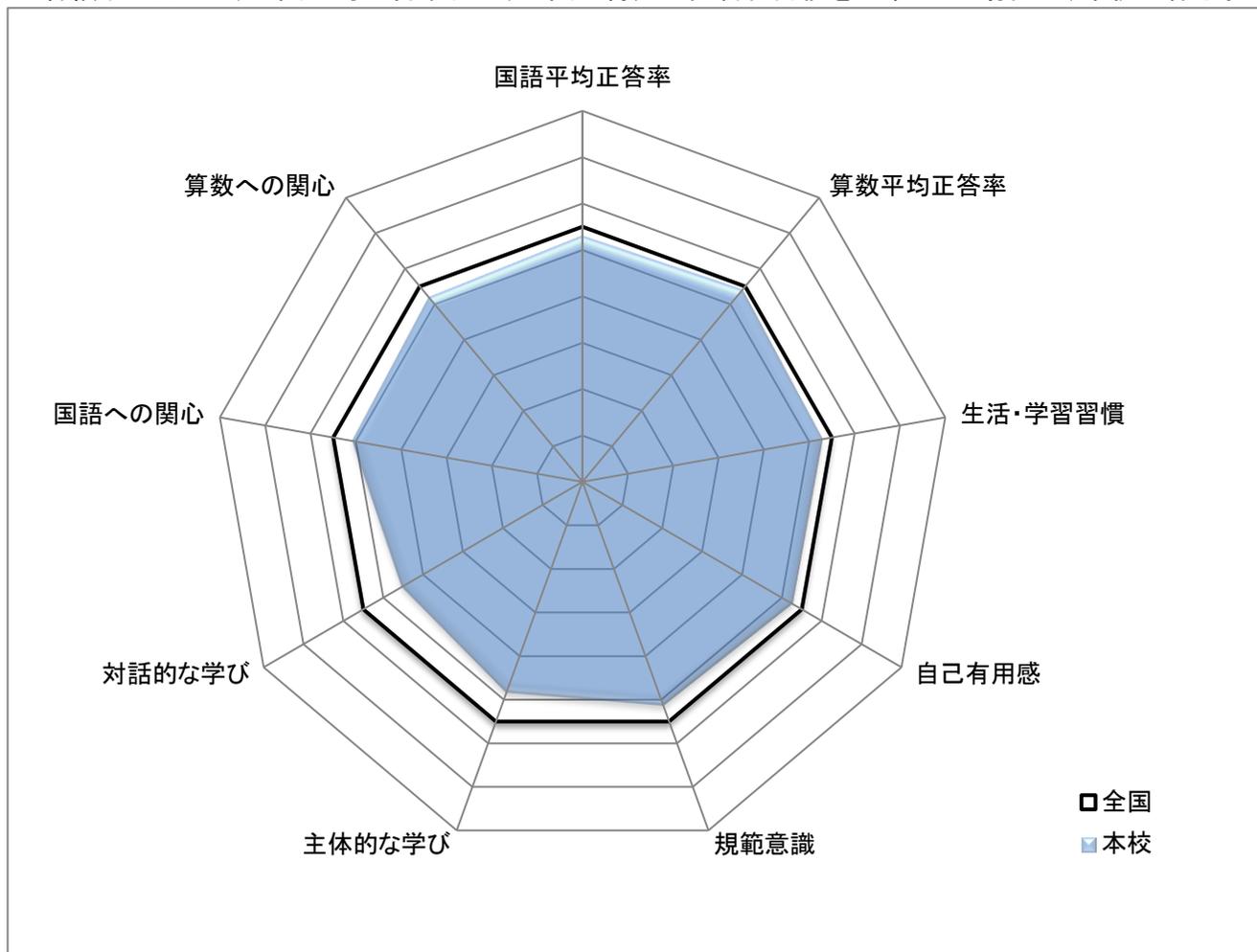


●各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《現状把握》

グラフを見ると、全国の平均正答率に近付いてきたことが分かる。アンケート結果から、算数少数授業の成果を子供たち自身が感じていることが分かり、算数の平均正答率も昨年度に比べ高くなっている。しかし、言語活動の正答率が低くなっており、国語科や算数科など各教科において、自分の考えを相手に説明することに苦手意識をもつ児童が多いことが分かる。国語科「読むこと」において得点が伸び悩んでおり、文章中の表現方法の効果について問われる問題に課題が見られた。算数科では、領域別に見た時には「データの活用」、問題形式を見ると記述式の問題で正答率が低かった。

《授業改善のポイント》

教科を問わず、自分の考えを発表する時には、相手に理解してもらえよう、話の組み立て、構成を工夫し、授業中のグループ活動で自分の考えを伝え合う機会を多く設定していく。国語科では特に文学的な文章を学習する際に、文章中の表現方法の効果について考える学習を取り入れていく。算数科では、必要な情報を資料から読み取る力を身に付けさせるため、意図的に資料を提示し考察させていく。また、答えをどのように導き出したのか、自分の考えを文章化できるよう、各教科で取り組ませていく。対話的な学びが低かったことに対して、学級生活をより良くするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を導き出す活動経験が少ないことが原因であると考えた。学級会だけでなく、各教科でお互いの考えのよさを共有する活動を積極的に取り入れていく必要がある。

《チャートの特徴》

＜全国と本校の平均正答率＞

国語 全国 65.6% 本校 63%
算数 全国 63.2% 本校 62%

国語、算数共に全国の平均正答率にせまっており、各教科への関心や自尊感情も昨年度までに比較すると高まってきている。

対話的な学び・主体的な学びの割合が低い。

《家庭・地域への働きかけ》

家庭生活週間や家庭学習週間を利用して、規則正しい生活・学習習慣が身に付くように家庭との連携を図っていく。また、ベーシックドリル(算数)の診断テストの結果を基に、個人分析シートを作成する。家庭学習や中学習の時間に、自分が苦手とする単元のプリントを選択し、繰り返し行うようにしていく。